

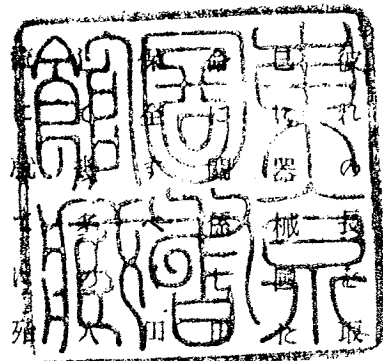
水論

西
師
竟
著

№ 2493/24

治水論序

維新以來凡百の事物悉く改良せざるはあ
技術に至つては陸に瀛車電線あり海に瀛船あり
此外開鑿魚獲より凡百の製造に至るまで多くは



りて我が短を補ひ此日本國をして
るの域に進ましめなりと雖ども人
園に關係し之を利用すれば人命を
園に灌漑をべく否らされば忽ちに
命を損し幾多の田園を荒らすの河
前に比して及ばざるものあるが如し是れ近來各
地に水害の甚たしきものありて爲めに我國の損
失年々凡そ二千万圓以上に及ぶの由縁あるべし

西君金城氏茲に見るありて夙に治水の術を講じ
近頃一書を著して之を公にせんとすど聞く茲に
之を尋常の著書徒らに時好に投して書肆を利し
併せて自己の利を謀るものと一視す可けん故余
深く其著の我國の弊に中るを喜ひ一言を卷首に
題すること此くの如し

辛卯十一月

琢園 井上角五郎識



治水論序

今の時に際して日本の民力を休養せんと欲せば則ち茲に全國の諸河川に向て治水の大策を確立するより急なるはなきあり、即ち日本の人民をして毎年水害に依り被る所の莫大なる損失を免かれしむるの策に出でざるべからざるあり、例へば去る明治十八年の大水害に依り我國の農民が直接に被りたる所の損耗は無慮二千七百万圓以上の多きに達したり、而して此二千七百万圓の損耗なるものは實に水災の爲め烏有に歸し去りたる帝國富實の幾部分にして是れ蓋し水災なければ永く帝國の所有とし現存すべかりしものあるを不幸にして一朝水災に依り耗盡し消散し去りたるなり、水災の國力を滅殺する豈に驚くべきにあらざや、明治十四年以後數年間の經驗に依れば日本人民の毎年水害に依り損耗する所平均一千万圓以上の多さに及べり、而して我國の水害損失は年を追ふて甚しきを加へ今は毎年政府歳入額の八分一に相當すへき莫大なる國富を空しく水災の爲め殺ぎ去らるゝの勘定あり

國富の減耗猶忍ふべしとするも彼の洪水氾濫家没し人流るゝの慘狀は寧ろ吾人の見るに忍びず又聞くに忍びざる所なり、吁嗟洪水氾濫の大災禍は年々以て日本の國力を吸竭し縮少すること最も甚しく民力此れか爲めに凋衰し萎縮する極めて著しきものあり、民力休養の策を講むるもの豈に治水策に注目する所なくして可あらんや、今の操觚社會に在りて西師意兄の如きは誠に治水に熱心なる人あり、兄の治水論予其精確なるを知れり、今や治水論を出版するの舉あるを聞き一言を序して以て治水説の必要を明かにせんと云爾

治水論序

死地に在りて死を知らず災地に在りて災を慮ふ
ざるは愚者此事なり日本に在りて治水乃理に通
せざるもの亦愚者の誹を免れず
抑も治水學は日本に於て將來一科の専門學たる
べく、治水術は日本人の爲め永く一種の専門術と
るべきものなり否な日本に生れて治水の理に通
せざるもの人にして衣食の理に通せざるより
を更に危険あり、今や治水論の出版あり、日本治水
學の爲め有要の出版とるを喜ばざるべからば聊
ち一言を序は

稻垣示

自序

舜不知禹非聖。禹不治水非仁。舜殛
鯀爲道殛之也。其舉禹爲道舉之也。
天下有溺者。禹思由已溺之。而鯀不
然。舜不私於鯀。而全德於禹。蓋宜矣。
抑陰陽之事。予不必言也。今也天下
憂澤水。甚於禹之時。禹能治水。而惡
旨酒。疎儀狄。今之君子不能治水。而
寧恬然不自愧。予竊怪焉。

著者 西 師 意 誌